

★今月のきら星・・・牛の尿に価値を見出す研究者 環境大善株式会社 加藤 勇太 研究員

北見市の環境大善（株）の研究員の加藤 勇太さんを紹介します。オホーツク地域の酪農は、生産基盤強化等の観点から規模拡大が進み、それに伴って家畜ふん尿の処理の問題が深刻化してきている状況にあります。

加藤さんが勤める環境大善（株）は、北見市内に本社を置き、牛の尿を微生物により分解処理した液を原料として消臭剤・土壌改良剤の製造・販売を業とする企業で、日本国内のデパート、ホームセンターでの販売はもとより中国・東南アジアへ輸出を行っています。加藤さんは、そんな廃棄物でしかない牛の尿を原料とした製品の研究・開発に携わっています。

加藤さんと家畜ふん尿との出会いは、加藤さんが北見工業大学の大学院生時代、バイオプロセス制御をテーマとする研究室に在籍していた3年前に遡ります。環境大善（株）社長の窪之内誠氏が加藤さんの所属していた研究室を訪れ、牛の尿を原料とした製品の効果について科学的な裏付けを依頼したことから始まります。その当時就職活動をしていた加藤さんは牛の尿を発酵させるという事業内容に興味を惹かれ、環境大善（株）へ入社し製品の研究・開発に携わることとなりました。以来、北見工業大学と環境大善（株）の協力体制は深まり、科学的裏付けにより販売を拡大することにつながりました。現在は、会社で働きながら出身大学である北見工業大学に2019年4月より再入学し博士号取得を目指しています。

加藤さんに今後の目標を尋ねると、牛の尿を発酵させた液が持つ様々な用途への適応可能性を見出すことと同時に、より速く安定して牛の尿を分解するシステムを構築し、全世界へ普及させることで牛の尿による環境汚染を食い止めることだと目を輝かせながら語ってくれました。

まだまだ一般的でない牛の尿の商品化は、酪農経営の観点からも、「家畜ふん尿は廃棄物」という常識を覆し、180度違った視点で家畜ふん尿に向き合うものであり、今後の酪農経営のコスト削減や地域の環境問題改善など、酪農経営が抱える課題解決のひとつの事例として注目度は高まっています。現状では、原料として利用される尿の量は、地域内で排出される量に比べて少ない量ではありますが、今後さらなる利用が見込めるような研究開発が期待されます。

